様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：１４６０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2015
課題番号：２４５３０７８７

研究課題名（和文）ママ友関係における対人葛藤に関する研究：つながりの多様性と社会的文脈からの検討

研究課題名（英文）A study on the friendship between mothers: diversity of ties in their network and the effect of social context

研究代表者
中山　満子（Nakayama, Michiko）

奈良女子大学・人文科学系・教授

研究者番号：３０２３５６９２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、ママ友関係を小規模に形成された集団と考え、(1)ママ友という小集団のつながり方（強さ、多様性）、(2)ママ友間の対人葛藤の特徴と、葛藤及び対処法に及ぼす社会的文脈の影響、(3)ママ友関係が他の社会活動に及ぼす影響について検討することを目的とした。
研究の結果、(1)ママ友関係のつながりは、ゆるやかで希薄な場合が多い、(2)対人葛藤は、つながりが緊密な場合に生じやすい、(3)対人葛藤を経験したときのコーピングは、社会的文脈（関係流動性）に調整される、(4)ママ友を含む対人関係についての成果感覚を得ることが、広く向社会行動への契機となりうることが示された。

研究成果の概要（英文）：In the present study, we supposed that “Mamatomo”, which means friendship between mothers rearing little children, formed small groups. The purposes of this study were (1) to examine how mothers formed networks with their friends (i.e., strength and diversity of ties in the networks), (2) to find the characteristics of interpersonal conflict among friends, and the effect of social context on conflicts and the coping strategies, (3) to examine the effect of relationship with friends on prosocial activities.
The findings are as follows. (1) The ties in networks of mothers were relatively weak, (2) interpersonal conflicts were likely to be occurred in the groups with strong ties, (3) coping to the conflicts were moderated by social context (i.e., relational mobility), and (4) when mothers perceived good relationships with their friends in a prosocial activities, they had the intentions to participate in further prosocial activities.

研究分野：対人心理学

キーワード：友人関係　葛藤　コーピング　向社会行動

１．研究開始当初の背景

育児中の母親同士の友人関係を「ママ友」という。インターネットや育児雑誌には、「ママ友」関連のトラブルや悩みについての相談が数多く寄せられている。多くの母親が「ママ友関係」が他の対人関係とはどこか異なっていると感じ、悩みやトラブルに直面したときに対処に困り、悩んでしまっているという社会的背景から、本研究に着手した。

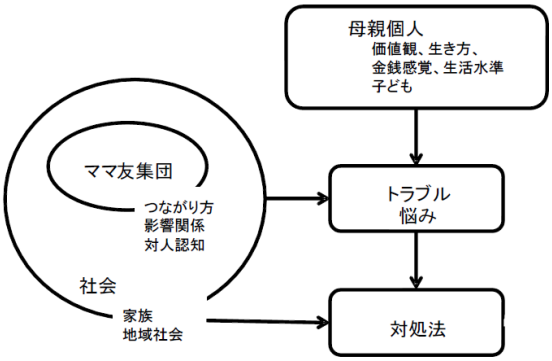

図１　研究の概要

我々のこれまでの研究から、ママ友関係における動機や役割期待、深さ-広さといった友人関係へ捉え方などは、青年期の女子の考え方と類似した特徴を有しており、青年期女子特有の友人関係を大人になってからも継承していると考えられた。そこで本課題においては、ママ友の特徴を、動機・希望や期待といった内的傾向ではなく、現実の社会生活の中に埋め込まれ構築される対人関係の実態の中に見出そうとした。ママ友関係には、大人になってからの友人関係ゆえの悩みやトラブル（以下『対人葛藤』）が存在すると考えられる。具体的には、生き方や価値観の違い、生活レベルの差、子どもの教育方針の違いなどがママ友に特有の対人葛藤を生み出すと考えた。

２．研究の目的

本研究の目的は、ママ友関係を１対１の親密な友人関係というよりは、小規模に形成された集団と考え、主として、(1)ママ友という小集団のつながり方（強さ、多様性）、(2)ママ友間の対人葛藤の特徴と、葛藤及び対処法に及ぼす社会的文脈の影響、(3)ママ友関係が他の社会活動に及ぼす影響について検討することを目的とした。

３．研究の方法

ここでは、主たる３つの調査研究について報告する。

（１）調査１：2014 年 3 月に Web 調査を実施し、就学前の子どもをもつ母親 400 名（平均年齢 37.2, SD=4.5）からデータを取得した。この調査では、ママ友のつながり方の実態を知ること、つながり方と葛藤との関連を探索的に検討することを目的とした。ママ友を１人ずつ 5 人まで想起してもらい、親しさや相手の性格の評定を求めた。またママ友どうしが知り合いかどうかを尋ねた。ママ友との葛藤経験についても尋ねた。

（２）調査２：2014 年 9 月に Web 調査を実施し、10 歳から 15 歳の子どもを持ち、一度でも PTA 活動に参加した経験がある女性 120 名（平均年齢 43.48 歳, SD=4.7)からデータを得た。ママ友を形成・維持する社会的文脈のひとつである PTA 活動に焦点づけ、PTA 活動に参加することによって得られる効果認識や内的報酬が、さらなる向社会活動に結びつくかどうかを検討した。

（３）調査３：2016 年 3 月に Web 調査を実施し、就学前の子どもを持つ 250 名の女性（平均年齢 36.8、SD=6.0）から回答を得た。ママ友間の葛藤経験時の対処法（コーピング）の選択に際しては、ママ友関係にある当事者どうしの関係のみならず、当事者をとりまく社会環境が影響すると考えられる。そこでこの調査では、社会的文脈がどのように影響するのかを検討するために「関係流動性」という概念に着目して変数とした。関係流動性とは、「個人を取り巻く特定の社会または社会状況に存在する対人関係の選択機会の多寡のことであり、当該社会環境における新たな対人関係の形成、および既存関係の維持や解消の自由度を指す（佐藤・結城、竹村, 2011 など）」概念である。主に文化心理学の分野で研究されてきたが、本研究では、当事者を取り巻く社会環境を、どのように認知しているかの指標として用いることとした。

４．研究成果

３つの調査研究について、それぞれ主な結果を述べる。

（１）調査１：主たる検討事項は、ママ友間のつながり方と葛藤との関連についてであった。

まずママ友数が 5 人未満である人と葛藤が全くないと答えた人を除き、192 名を分析対象とした。ママ友どうしのつながりについて、5 人のママ友（友人 A～E）が、それぞれ知り合いかどうかを、０・１でコーディングし、クラスター分析を行った。その結果解釈可能性から 3 クラスターを採用した。CL1（46 名）は、ママ友 5 名ほぼ全員が知り合いである、高密度群、CL2（96 名）は、半分ずつくらいが知り合いの中間群で様々なケースが混在していた。CL3（50 名）は、ママ友同士がお互い知り合いでない場合の多い希薄群であった。CL3 では A と B については半数くらいは知り合いであり、その他は B→C、C→D、D→E というように、連続して想起したママ友どうしでは 20～30%前後は知り合いであるが、A と C、B と E のように想起順序が隣接し

てない場合には、知り合いでない場合がほとんどであった。つまり希薄群ではママ友という集団を形成しているというよりは、１対１の関係を複数形成していると思われる。また5 人のママ友を想起してもらう場合、緊密なつながりを持つ“集団”というよりも、ゆるやかな、あるいは希薄なつながりの友人関係が想起されることが多いことも示された。

次にこれらのつながり方（群）と葛藤との関連を分析した結果、ママ友がほぼ全員知り合いであり、集団を形成していると思われる高密度群において葛藤が多いことが示された。

葛藤について詳しく検討するために、葛藤がひとつでもあると回答した258 名を対象として、クラスター分析によって葛藤の類型を抽出したところ、4 クラスターが抽出された。CL1 は全体に葛藤の小さい低葛藤群、CL2 は社会格差に関連した葛藤の多い格差群、CL3 は全体に葛藤の多い高葛藤群、CL4 は「ぐちを聞かされる」という項目のみの得点が高いぐち苦痛分群であった。これらの類型は、先行研究（中山・池田，2014)と類似したものであった。これらの葛藤類型への社会変数の影響を検討するために、職業との関連を分析した。その結果、葛藤低群ではフルタイムが多く、葛藤高群ではパートが多いこと、格差群はフルタイムが少なく、専業主婦が多いことが示され、当事者のもつ社会的文脈（就業状況）により、経験する葛藤が異なることが示された。

（２）調査２：この調査では、PTA 活動という社会的文脈に着目して、ママ友を含む対人関係が他の社会活動（自治会、ボランティア）への参加の契機になりうるのかどうかを検討した。

一度でも PTA に参加したことのある 120 名を対象に分析を行い、次の結果を得た。

PTA 活動で得られた効果認識（役にたったという感覚)、内的報酬（人間関係の広がり、自己評価)、負担感、および今後の向社会活動への参加意向について得点化し、負担感別に重回帰分析を行った。人間関係の広がりと自己評価は相関が高かったため、別々に分析に投入した。結果を表１から表６に示す。

総じて、実際に参加した PTA 活動において重い負担を感じた群において、役に立ったという効果認識や内的報酬を得た場合に、もう一度 PTA 活動をしようと言う意向や、PTA 以外の社会活動を行おうという意向につながることが示された。

表１　PTA 中心的活動への参加意向

	低負担群		高負担群	
向社会行動	.461 **	.387 *	−.031	−.073
効果認識	−.037	−.016	.344 *	.176
内的報酬(自己評価)	.210	−	.336 *	−
内的報酬(人間関係の広がり)	−	.214	−	.523 **
調整済みR^2	.218 **	.213 **	.348 **	.399 **

**p <.01, *p <.05

表２　PTA サブ的活動への参加意向

	低負担群		高負担群	
向社会行動	.366 *	.309 †	−.005	−.052
効果認識	.355 †	.193	.415 **	.157
内的報酬(自己評価)	−.257	−	.317 *	−
内的報酬(人間関係の広がり)	−	.054	−	.623 **
調整済みR^2	.148 *	.101	.419 **	.525 **

**p <.01, *p <.05, †p <.10

表３　継続的ボランティアへの参加意向

	低負担群		高負担群	
向社会行動	.350 *	.449 *	.054	−.004
効果認識	.192	.218	.194	.045
内的報酬(自己評価)	−.154	−	.522 **	−
内的報酬(人間関係の広がり)	−	−.254	−	.664 **
調整済みR^2	.071	.093	.431 **	.461 **

**p <.01, *p <.05

表４　単発的ボランティアへの参加意向

	低負担群		高負担群	
向社会行動	.265	.375 *	.194	.146
効果認識	.306	.293	−.024	−.168
内的報酬(自己評価)	−.271	−	.416 *	−
内的報酬(人間関係の広がり)	−	−.307	−	.562 **
調整済みR^2	.062	.065	.171 **	.205 **

**p <.01, *p <.05

表５　中心的地域活動への参加意向

	低負担群		高負担群	
向社会行動	.343 *	.257	.103	.069
効果認識	−.072	−.043	.171	.031
内的報酬(自己評価)	.257	−	.266	−
内的報酬(人間関係の広がり)	−	.254	−	.423 **
調整済みR^2	.127 *	.117 †	.142 **	.177 **

**p <.01, *p <.05, †p <.10

表６　サブ的地域活動への参加意向

	低負担群		高負担群	
向社会行動	.309 †	.313	.132	.107
効果認識	.180	.149	.340 *	.299 †
内的報酬(自己評価)	−.082	−	.242	−
内的報酬(人間関係の広がり)	−	−.031	−	.272
調整済みR^2	.044	.040	.292 **	.289 **

**p <.01, *p <.05, †p <.10

特に、内的報酬（人間関係の広がり）の影響が大きいことも示された。「人間関係の広がり」とは、「他の PTA 会員と楽しく活動が出来た」「自分に新しい友達ができた」などを含む得点であり、活動の中で、ママ友関係を含むポジティブな人間関係を形成することが、大きな報酬と認識され、さらなる活動への意向につながっていることが明らかになった。またこの「正の循環」は、PTA 活動にとどまらず、自治会や町内会などの地域活動やボランティア活動などの広範囲な向社会行動にもつながることが示された。

（３）調査３：この調査では、主として「関係流動性」の認知が葛藤経験時のコーピング選択にどのような影響を与えるのかについて分析を行った。

関係流動性については、友人や知人、近所の人、職場の知り合いなど自分のまわりの人

に質問文がどれくらい当てはまるかを回答してもらい、「新規出会い・選好」「非流動性」という２つの因子を抽出した。「新規出会い・選好」得点が高いことは、自分のまわりの環境は、新しく人に出会う機会が多く、自分の好みで集団を移ることが出来ると認識していることを示し、「非流動性」得点が高いと言うことは、今いる環境や人間関係に満足していなくても、そこに留まり続けるしかないと思う傾向が強いことを示している。葛藤経験時のコーピングとしては、ポジティブコーピング、ネガティブコーピング、解決先送りコーピングの３種類の得点を用いた。

本研究では、①葛藤経験の多寡がコーピングに影響を及ぼし、②社会的文脈である関係流動性は調整変数として働く、という仮説をたてて検証した。

出会い・選好を調整変数として、葛藤との交互作用項を投入した重回帰分析の結果を表７～表９に示す。

表７　ポジティブコーピングを基準変数、出会い・選好を調整変数とした重回帰分析

	b	SE
葛藤	.009	.002 **
出会い･選好	.109	.034 **
葛藤×出会い･選好	-.003	.002 *
R^2	.114	

表 8　ネガティブコーピングを基準変数、出会い・選好を調整変数とした重回帰分析

	b	SE
葛藤	.015	.002 **
出会い･選好	.040	.037
葛藤×出会い･選好	.000	.002
R^2	.192	

表 9　解決先延ばしコーピングを基準変数、出会い・選好を調整変数とした重回帰分析

	b	SE
葛藤	.011	.002 **
出会い･選好	.193	.038 **
葛藤×出会い･選好	-.001	.002
R^2	.167	

分析の結果、葛藤の多寡はいずれのコーピングにも影響していた。ポジティブコーピングに対しては、出会い・選好との交互作用が有意であった。そこで単純傾斜分析を行ったところ、図２に示す結果が得られた。出会い・選好の認知が高い場合には、葛藤の多寡によらず、ポジティブコーピングを選択しやすいが、出会い・選好の認知が低い場合には、葛藤が少ない場合でもポジティブコーピングを選択する傾向が低いことが示された。すなわち自分のまわりの社会環境では、新たに人と出会ったり、自分の好みでつきあい方を変えることが容易であると認知している場合には、ママ友との葛藤を経験したときに、「相手の良いところを探す」「相手の気持ちになって考える」などのポジティブなコーピングを行いやすいのに対して、自分を取り巻く環境を新規の出会いの機会が少なく、自分の好みではつきあい方を変えられないと認知していると、葛藤経験が少ない場合にポジティブなコーピングを取りにくいことが示された。

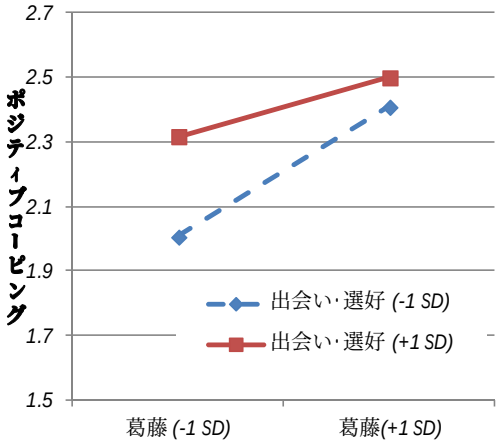

図２　ポジティブコーピングを基準変数、出会い・選好を調整変数とした単純傾斜分析

次に非流動性を調整変数として、葛藤との交互作用項を投入した重回帰分析の結果を表 10～表 12 に示す。

表 10　ポジティブコーピングを基準変数、非流動性を調整変数とした重回帰分析

	b	SE
葛藤	.008	.002 **
非流動性	-.036	.038
葛藤×非流動性	.002	.002
R^2	.062	

表 11　ネガティブコーピングを基準変数、非流動性を調整変数とした重回帰分析

	b	SE
葛藤	.014	.002 **
非流動性	.062	.040
葛藤×非流動性	-.001	.002
R^2	.197	

表 12　解決先延ばしコーピングを基準変数、非流動性を調整変数とした重回帰分析

	b	SE
葛藤	.009	.002 **
非流動性	.121	.042 **
葛藤×非流動性	.007	.002 **
R^2	.141	

分析の結果、非流動性と葛藤との交互作用が有意であったのは、解決先延ばしコーピングであった。単純傾斜分析を行ったところ、図 3 に示す結果が得られた。

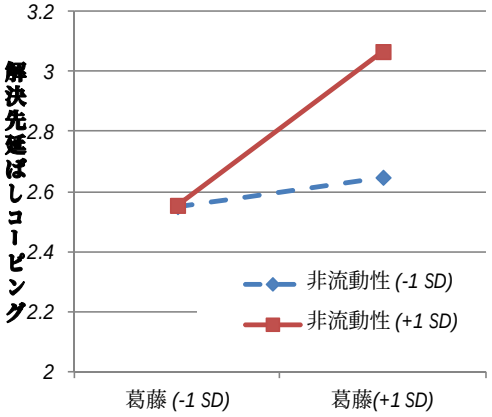

図 3　解決先延ばしコーピングを基準変数、非流動性を調整変数とした単純傾斜分析

非流動性を低く認知している場合には、葛藤の多寡によらず解決先延ばしコーピングが選択される傾向は低いが、非流動性を高く認知している場合には葛藤経験が多い時に、解決先延ばしコーピングが行われる傾向が高いことが示された。すなわち、自分のまわりでは、社会環境や人間関係に満足していなくても、そこを離脱する自由が低いと思う場合、ママ友間の葛藤を多く経験すると、「気にしないようにする」「成り行きに任せる」などのコーピングを取るという傾向が明らかになった。

（4）まとめ

本研究の主な知見をまとめると、①ママ友関係のつながりは、ゆるやかで希薄な場合が多い、②対人葛藤は、つながりが緊密な場合に生じやすい、③対人葛藤を経験したときのコーピングは、社会的文脈（関係流動性）に調整される、④ママ友を含む対人関係についての成果感覚を得ることが、広く向社会行動への契機となりうる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 1 件）

(1)中山満子（2016）PTA 活動経験が向社会活動への参加意向に及ぼす影響，対人社会心理学研究，16，41-46.

〔学会発表〕（計 1 件）

(1)中山　満子（2016 発表予定）ママ友関係における葛藤へのコーピング―関係流動性との関連―　日本パーソナリティ心理学会第 25 回大会（大阪）

６．研究組織

(1)研究代表者

中山　満子（NAKAYAMA Michiko）

奈良女子大学・研究院人文科学系・教授

研究者番号：30235692

(2)研究分担者

池田　曜子（IKEDA Yoko）

流通科学大学・人間社会学部・准教授

研究者番号：90523837